

おおだいやまもと
史跡大平山元遺跡整備基本構想

2017（平成29）年3月

青森県東津軽郡外ヶ浜町
外ヶ浜町教育委員会

おおだいやまもと
史跡大平山元遺跡整備基本構想

2017（平成29）年3月

青森県東津軽郡外ヶ浜町
外ヶ浜町教育委員会

序

史跡大平山元遺跡は、後期旧石器時代後半期から縄文時代草創期まで、石器の特徴や生活に関わるものの移り変わりを追うことができる遺跡です。

2013（平成25）年3月27日に国史跡に指定されたことを受け、当町では史跡の適切な保存と活用に向け、2015（平成27）年度に保存管理計画を策定し、引き続いて整備の検討をはじめました。

本書は、史跡大平山元遺跡の整備・活用の主題及び方向性、基本方針等を示した基本構想をまとめたもので、今後は、整備基本計画を策定する予定です。

これまで、史跡大平山元遺跡整備基本構想の策定にあたり、ご指導ご協力を賜りました文化庁及び青森県教育委員会、外ヶ浜町大平山元遺跡等整備活用検討会議の委員長はじめ委員の方々、関係者の皆様に厚くお礼申し上げますとともに、今後の整備に向けて引き続きのご支援をお願い申し上げます。

2017（平成29）年3月31日

外ヶ浜町教育委員会

教育長 村 田 長 年

例 言

1. 本書は、史跡大平山元遺跡の整備基本構想です。
2. 史跡大平山元遺跡整備基本構想策定事業は、2016（平成28）年度に実施しました。
3. 実施にあたって、外ヶ浜町大平山元遺跡等整備活用検討会議を開催し、委員の助言を受けています。

4. 外ヶ浜町大平山元遺跡等整備活用検討会議委員は、以下のとおりです。

委員 長 川 口 潤 （青森県埋蔵文化財調査センター副参事）

副委員長 一町田 工 （一般社団法人三内丸山応援隊代表理事）

稲 田 孝 司（岡山大学名誉教授）

岡 村 道 雄（奈良文化財研究所名誉研究員）

三 宅 徹 也（元青森県埋蔵文化財調査センター次長）

山 口 義 伸（元青森県立浪岡高等学校教諭）

野 藤 勝 雄（外ヶ浜町自治会連絡協議会長）

笹 木 耕 一（外ヶ浜町大平地区区長）

笹 木 実 （地権者代表）

中 野 仁 （外ヶ浜町教育委員会教育委員）

佐々木 文 武（外ヶ浜町文化財保護審議会会長）

鈴 木 進 （外ヶ浜町議会議長）

宮 本 一 男（外ヶ浜町役場参事総務課長事務取扱）

敬称略

5. 本書の編集は、外ヶ浜町教育委員会社会教育課が行いました。

史跡大平山元遺跡整備基本構想 目 次

1. 整備基本構想の目的と経緯	1
(1) 目的	
(2) 経緯	
2. 史跡の概要	2
(1) 概要	
(2) 本質的価値	
3. 当該地域の現状	4
(1) 自然環境	
(2) 社会環境	
(3) 歴史環境	
4. 整備の目的と基本方針	20
(1) 目的	
(2) 基本方針	
5. 基本構想	21
(1) テーマ	
(2) 指定地内のゾーニング	
(3) 指定地周辺のゾーニング	
6. 保存のための整備の方針	25
(1) 保存のための整備の方針	
7. 公開・活用のための整備の方針	26
(1) 公開・活用のための整備の方針	
(2) 史跡内の施設整備の方針	
(3) ガイダンス施設の方針	
8. 管理・運営の方針	28
(1) 管理・運営の方針	
9. 事業に向けた課題の整理	28
(1) 課題と今後の展望	

史跡大平山元遺跡整備基本構想

図 版 目 次

図 1	津軽半島北部と史跡の位置・・・・・・・・・・・・・・・・	4
図 2	地質図・・・・・・・・・・・・・・・・	5
図 3	アスファルト産出地点等位置図・・・・・・・・	6
図 4	地形分類図・・・・・・・・	7
図 5	地形想定図・・・・・・・・	8
図 6	津軽半島の交通網・・・・・・・・	11
図 7	保存管理計画書における地区区分・・・・・・・・	22
図 8	周辺環境図・・・・・・・・	24

1. 整備基本構想の目的と経緯

(1) 目的

本整備基本構想は、史跡の適切な保存と活用を図るため、『史跡大平山元遺跡保存管理計画』に示された整備公開・活用にかかる基本方針のもとに、具体的な整備に向けたテーマ、ゾーン毎の方針、保存のための整備の方針、公開・活用のための整備の方針等を明確に定めることを目的とします。

(2) 経緯

史跡大平山元遺跡は、2013（平成25）年3月27日に国の指定を受けました（官報告示号外第63号、文部科学省告示第39号）。外ヶ浜町では、管理体制を整えるため、「史跡大平山元遺跡保存管理計画策定本部」「史跡大平山元遺跡整備基本構想策定本部」「史跡大平山元遺跡整備基本計画策定本部」を組織し、策定にあたっての助言等を受けるため、外ヶ浜町大平山元遺跡等整備活用検討会議を設置しました。

まず、史跡の保存管理計画を最優先で策定することとし、外ヶ浜町大平山元遺跡等整備活用検討会議を開催し、検討を重ねて2016（平成28）年3月に『史跡大平山元遺跡保存管理計画』を策定しました。

この間、外ヶ浜町では、2014（平成26）年に史跡大平山元遺跡を管理すべき地方公共団体としての指定を受け（平成26年7月10日付け、官報告示第6329号、文化庁告示第31号）、史跡の範囲も2015（平成27）年に追加指定されました（平成27年10月7日付け、官報告示号外第230号、文部科学省告示第173号）。

外ヶ浜町では、『史跡大平山元遺跡保存管理計画』の策定を受け、引き続いて速やかに『史跡大平山元遺跡整備基本構想』の検討に入ることにし、外ヶ浜町大平山元遺跡等整備活用検討会議を開催しました。同会議での詳細な検討とともに、文化庁記念物課整備部門及び青森県文化財保護課の指導を受けて、2017（平成29）年3月に『史跡大平山元遺跡整備基本構想』が策定されました。



史跡大平山元遺跡遠景（南上空より 2013（平成25）年撮影）

2. 史跡の概要

(1) 概要

史跡大平山元遺跡は、後期旧石器時代後半期から縄文時代草創期への移り変わりの様相を追うことができる遺跡です。

旧石器時代の特徴としては、主に関東地方や中部地方で見られる石器である「有樋尖頭器^{ゆうひせんとうき}」や北海道等で流行した「湧別技法^{ゆうべつ}」と呼ばれる特徴的な石器の作り方をういた「細石刃石器群^{さいせきじん}」、関東地方より西の方との関係を示す「野岳・休場型^{のだけやすみば}」に分類される「黒曜石製細石刃核」などが見つかっています。これらのような日本列島各地との関係を示す石器が多く見つかる旧石器時代の遺跡は、北日本では他に例がありません。

縄文時代草創期では、「神子柴・長者久保石器群^{みこしばちようじやくぼ}」と呼ばれる石器群とともに無文土器片や石鏃が確認され、その土器が最古段階の土器であることが明らかになりました。

このように史跡大平山元遺跡は、後期旧石器時代後半期から縄文時代草創期への石器群の移り変わり等をたどることができ、土器誕生の背景やその前後の様相を、検討する上で極めて重要な情報を持っている、縄文時代の始まりを示す遺跡です。



神子柴・長者久保石器群と土器片・石鏃

(2) 本質的価値

①後期旧石器時代後半期から縄文時代草創期への移行の様相を知ることができること

史跡大平山元遺跡から出土した多くの石器類から、時代によって移り変わる石器群の特徴がわかります。後期旧石器時代後半期では、ナイフ形石器と有樋尖頭器をもつ石器群、荒屋型彫器や湧別技法等による細石刃石器群等があります。

縄文時代草創期では、大型局部磨製石斧等を特徴とする神子柴・長者久保石器群に、最古段階の土器が伴って、旧石器時代から縄文時代への移行の姿を具体的に知ることができます。

②後期旧石器時代後半期における日本列島各地との関係を示す石器が多数出土すること

出土した後期旧石器時代後半期の石器類の中でも、有樋尖頭器は、関東地方や中部地方に集中して分布するものです。細石刃石器群は、湧別技法によって作られるものもあり、北海道で流行した削片系技術の南下との関わりを強く示すものです。

また、関東以西に特徴的な野岳・休場型の黒曜石製細石刃核もあって、日本列島各地との関係を示す石器が多数出土します。



細石刃石器群

③それら遺物群がそれぞれまとまって分布し、生活と石器製作の場が特定できること

史跡の立地する大平段丘上は、扇状地状を呈し水の流れによって生じた凹凸があります。遺物が広がっているところは、南北の浅い谷によって、東西ふたつに分断された凸部の微高地部分です。西側の微高地状地形には、神子柴・長者久保石器群が楕円形の範囲に分布し、土器片も出土しています。

東側の微高地状地形は、西側よりも大きく南北へ延びて、遺物も濃密に分布しています。複数の時期の遺物が重なり合うようにひろがって、ナイフ形石器・有樋尖頭器、細石刃石器群、神子柴・長者久保石器群に近似した両面調整尖頭器等が出土しています。



有樋尖頭器とナイフ形石器

3. 当該地域の現状

(1) 自然環境

①地勢

史跡大平山元遺跡のある外ヶ浜町は、陸奥湾に面している東側、津軽海峡(三厩湾)に面している北側を除くほとんどが山地(中山山地、平館山地、梵珠山地)や丘陵地に囲まれています。平野部は、南北にかけて走る海岸沿い、東西に流れる蟹田川流域、三厩地区の今別川流域の一部などの町面積全体の11%ほどで、国有林など山林が町域の大半を占めています。景勝地も多く、龍飛岬周辺及び今別町との町境にあたる平館地区弥蔵釜周辺は、津軽国定公園の指定を受けています。

津軽半島をほぼ南北に縦走している津軽山地は、西の津軽平野と東の陸奥湾に面した青森平野とを二分する脊梁をなしています。脊梁部には半島北端の龍飛崎から増川岳(713.7m)、四ッ滝山(669.6m)、木無岳(587m)、玉清水山(478.9m)、袴腰岳(627.9m)などの山稜が連なり、特に四ッ滝山及び木無岳を中心としてドーム状となっています。また、津軽半島北端において平館海峡に面して平館山地があり袴腰岳(707m)、木無岳(686m)、丸屋形岳(718m)などが連なり、同様にドーム状となります。この両山地は、南流し、陸奥湾に注ぐ蟹田川、北流し津軽海峡に注ぐ今別川で隔てられています。

特に、大平山元遺跡が立地します大平付近は両山地の狭間に存在する小規模な盆状凹地であって、津軽山地に発源する砂川沢及び大川目沢と、平館山地に発源する高石沢との合流点付近にあたり、それらの支流は蟹田川となり、大きく東へ流路をとり陸奥湾へ注いでいます。

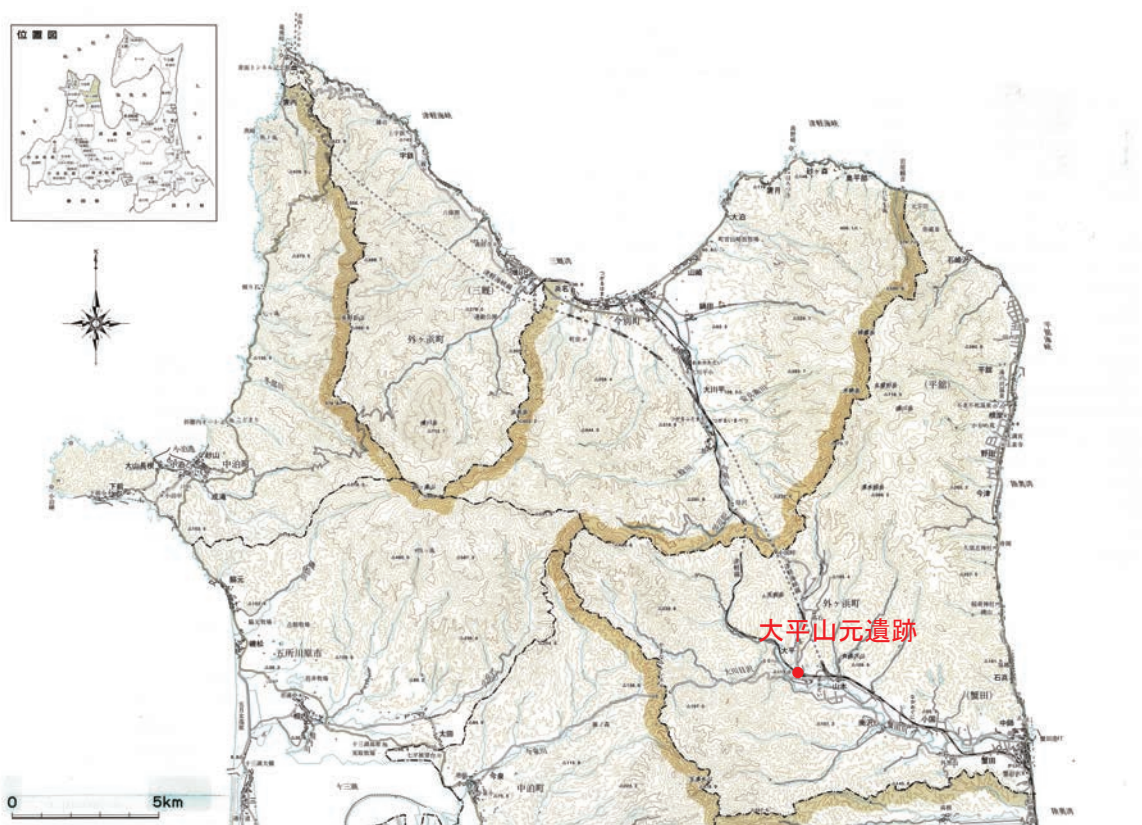


図1 津軽半島北部と史跡の位置(外ヶ浜町管内図より)

②地質

史跡周辺の地質を概説しますと、この地域は東北地方の、いわゆるグリーンタフ地域に所属しています。東西両山地のドーム構造を成す背斜部には基盤岩である新第三紀中新世の地層が堆積し、津軽断層を境にして東側の平館山地の間には第四紀更新世の地層が北北西－南南東の方向に帯状に堆積しています。中新世の地層としては冬部層、長根層、小泊層、塩越層等があります。両山地内のドーム中核部には、火山礫凝灰岩等の粗粒な火砕岩を主体とします冬部層及び長根層が分布しています。津軽断層以西には層理の発達した珪質泥岩を主とします小泊層が広範囲に堆積し、また北東端の平館ドーム外縁にも広く分布しています。一方、更新世の蟹田層は未固結の砂岩、砂質シルト岩からなっており、向斜部にあたる蟹田川流域や今別川流域に堆積しています。つまり、断層東端の沈降部には時代の新しい蟹田層が堆積し、東西両側のドームには古い火砕岩や堆積岩が露出していることを示しています。

このことから、津軽山地を刻む大川目沢や砂川沢などの河床からは石材として良質の珪質頁岩礫が転石として十分に採集され、また史跡近くを流れる蟹田川でも採集することができます。

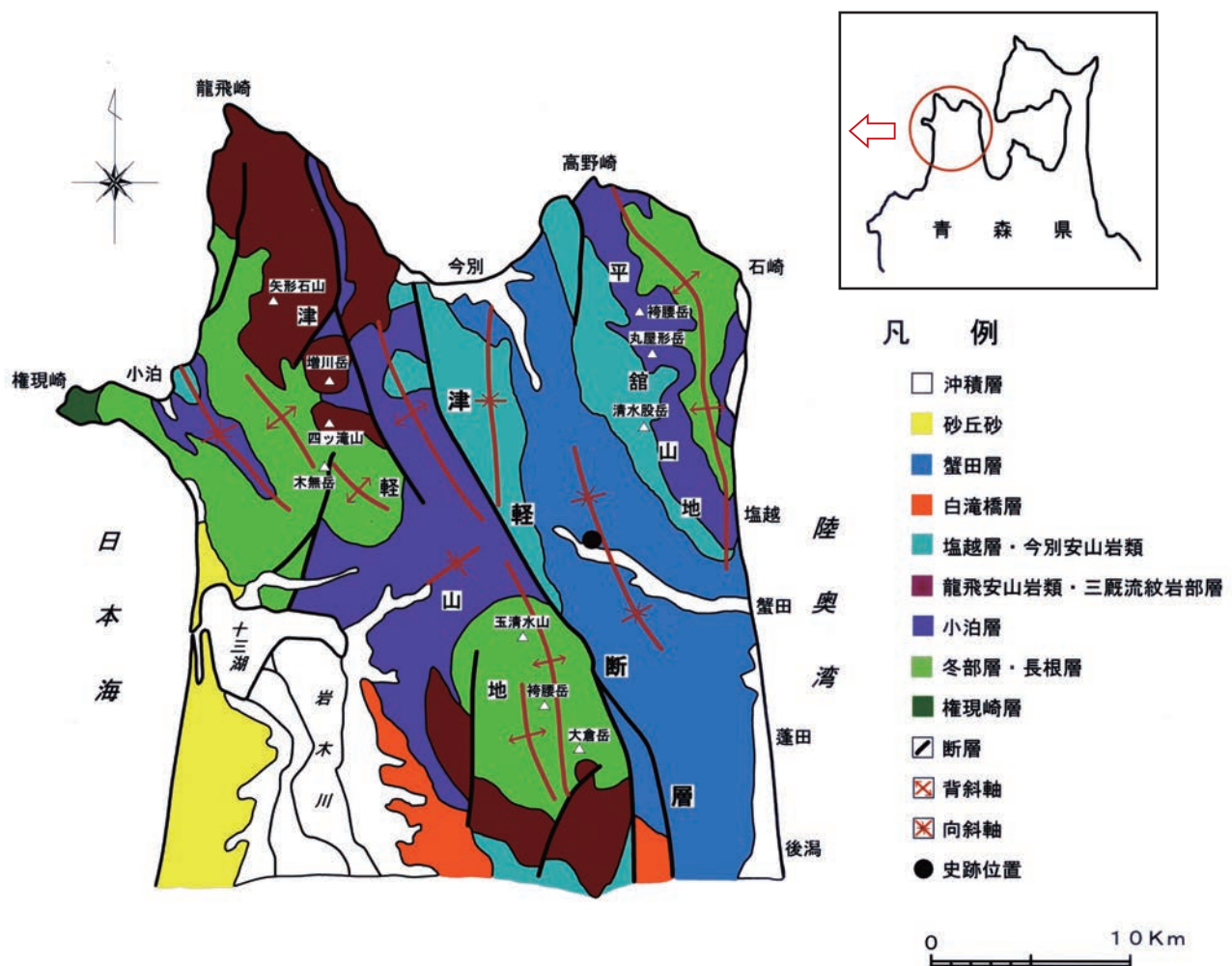


図2 地質図（箕浦ほか（1998）を抜粋、簡略化）

ところで、平館山地北端には青森県の指定天然記念物「赤根沢の赤岩」^{あかねさわ}が露出しています。この赤岩は、小泊層中の泥岩が赤鉄鉱の鉱染を受けたり置換したりした岩塊です。日光東照宮染色顔料に利用されたという記録があるように、古くからその存在は知られ、縄文時代からベンガラと呼ばれるこの赤鉄鉱を大いに利用していたと考えられます。また、平館山地東端の、磯山―塩越間の海岸線には天然アスファルトが産出する場所があります。アスファルトは地表面に岩塊として露出する珪質泥岩の亀裂からしみだし、乾性に富んでいて、もろく崩れやすいです。縄文時代から利用された可能性があります（図3）。

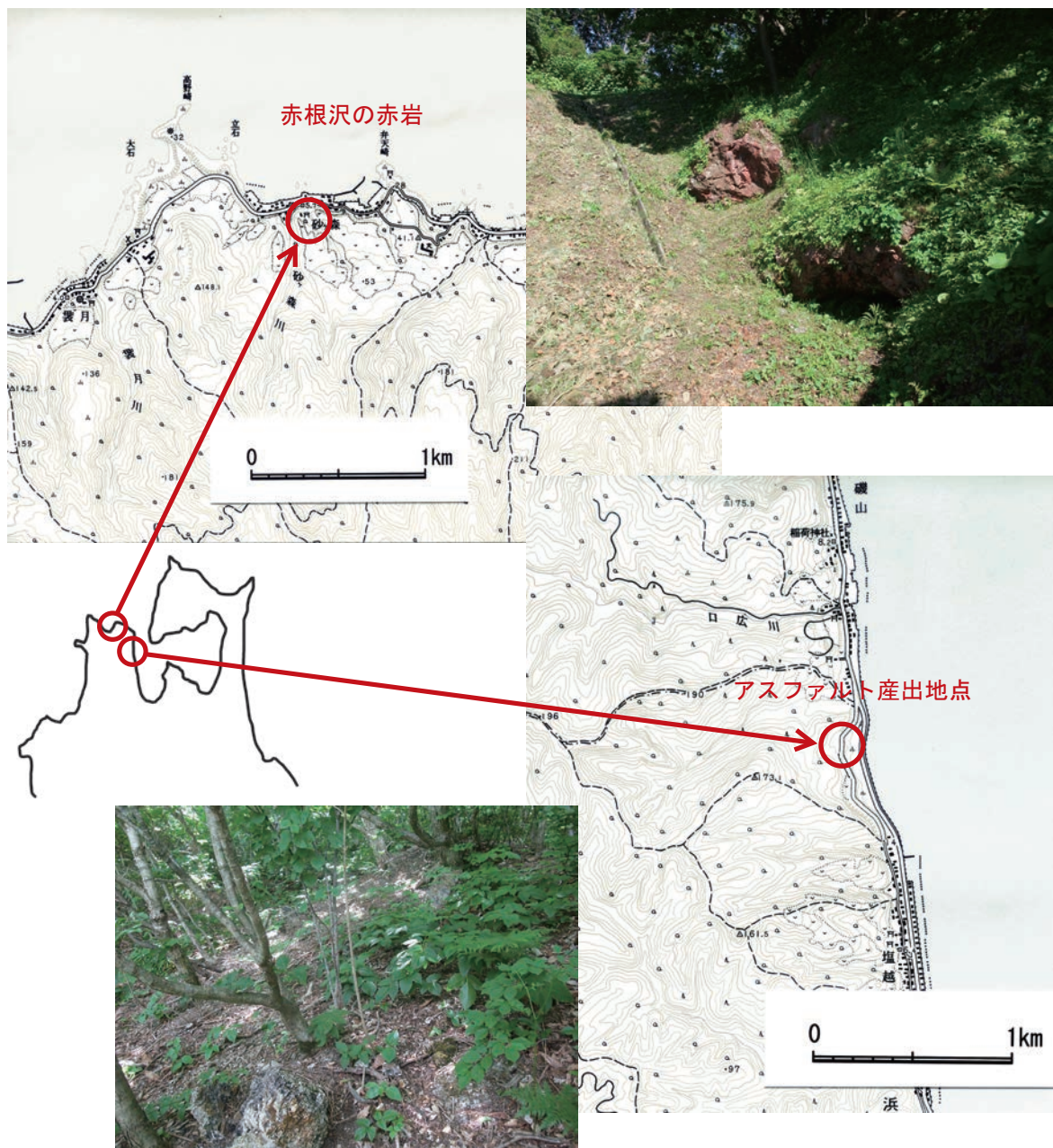


図3 アスファルト産出地点等位置図

③地形分類

史跡の位置する高石段沢の左岸の地形を概観します。高位段丘に相当します「高石段丘」は標高70～130m、開析度が大きく起伏に富み丘陵化しています。下位の「館ノ沢段丘」とは30m以上の段丘崖で接し、蟹田層を不整合に覆い、砂礫や成層砂を主体とします段丘砂礫層と粘土質ローム層で構成されています。中位段丘に相当します「館ノ沢段丘」は標高45～55m、開析度は大きいですが、頂部はきわめて平坦です。蟹田川北岸では舌状の分布を示し、「大平段丘」と約15mの段丘崖で接しますが、南岸ではやや下流側に広く分布し、河床面と約30mの急峻な段丘崖で接しています。段丘構成層としてローム層と砂礫層が認められますが、ローム層下部には風成再堆積の凝灰質ローム層が薄く堆積しています。なお段丘面上には、大平墓地公園遺跡が立地しています。

「大平段丘」は標高23～30mの低位段丘で、高石段沢左岸に分布しています。100分の2～3とやや勾配があり、氾濫性堆積物で構成され、段丘面の開析による起伏のほかに土石流フロントからなる微高地も認められ、扇状地状を呈する段丘上に史跡が立地します。沖積段丘の「山本段丘」とは約2～3mの傾斜面で接していますが、前縁部は「山本段丘」の構成層に被覆され、ほぼ連続する箇所もあります。しかし、大平段丘は傾斜面であり、「山本段丘」が平坦面なことから、その境界部は容易に識別できます。本史跡の段丘構成層は発掘調査によると、下部には氾濫によって供給された砂礫が認められ、上部には泥流によるローム質粘土及び粘土質細粒砂が堆積しています。最上部にはローム質粘土が堆積しますが、地形的凹地では粘土質であったり細粒砂であったりと層相変化が著しく、増水等による再堆積相を示唆しています。

「山本段丘」は蟹田川流域にあって、特に合流点より下流側の左岸に広く分布しています。標高18～21mの沖積段丘で、水田として土地利用されています。河床面とは2～3mの高度差が認められ、構成層として厚さ約2mの砂泥互層とその下位に礫層が堆積しています。

以上から、史跡大平山元遺跡が立地する大平の地形は、河川の度重なる氾濫により砂礫などの氾濫性堆積物が常に供給される環境にあり、特に支流の高石段沢左岸には小規模ながら扇状地として形成されていることがわかります。

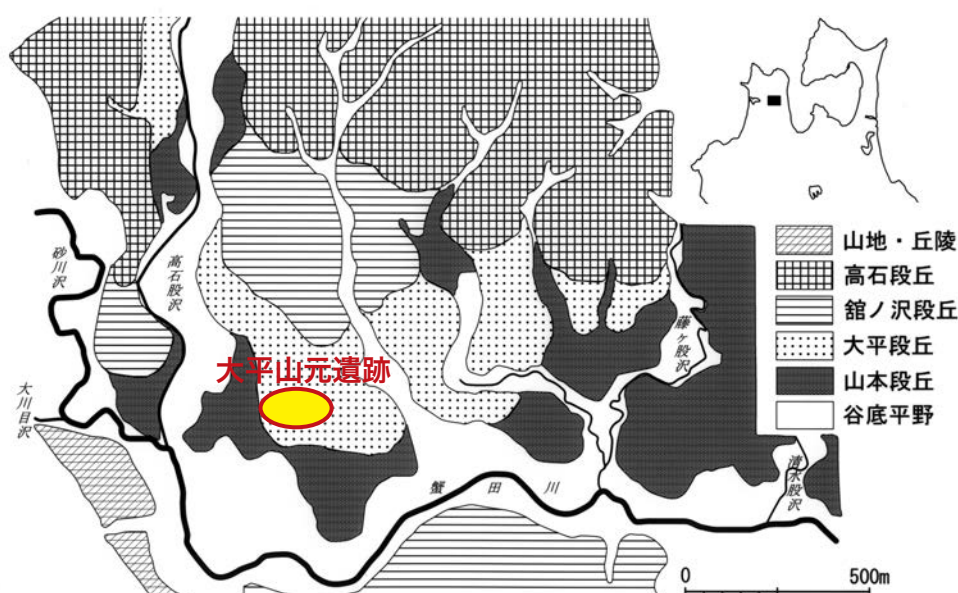


図4 地形想定図（外教委 2011年『大平山元』地形想定図を改変）

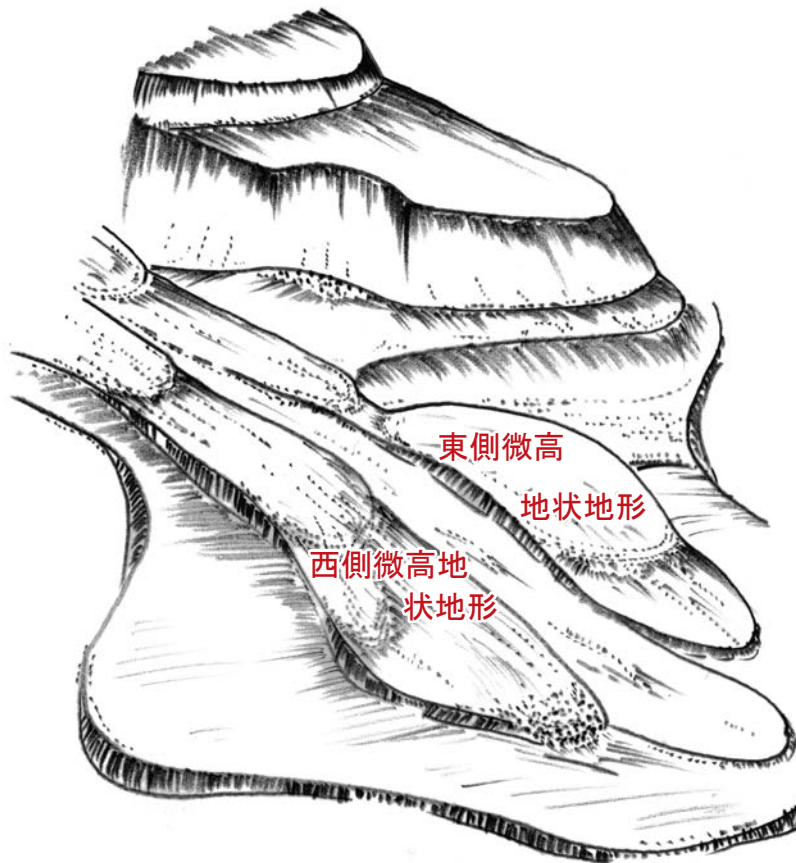


図5 地形想定図（外教委 2011年『大平山元』地形想定図を改変）

④蟹田川

外ヶ浜町蟹田地区の中央部を流れる蟹田川(明治時代までは「中師川」^{ちゅうし})は、津軽山地と平館山地に源流をもっています。支流が多く、平館山地からは、高石股沢^{ふじがまた}、藤ヶ股沢^{ふじがまた}、清水股沢^{しみずまた}、津軽山地からは、砂川沢および大川目沢、南股沢などが流れます。両山地からの支流が大平地区で合流して本流を形成し、本史跡から8 kmほど東流して陸奥湾に注いでいます。流路延長は21.8km、流域面積は113.4km²です。

生息する魚介類は、カワヤツメ、コイ、キンブナ、ウグイ、ワカサギ、アユ、アメマス、マハゼ、ヌマガレイ、スジエビ、モクズガニ等が確認されています。河口付近では、5月頃、産卵のために遡上するハゼ科の「シロウオ」漁が行われ、両岸に設けられるエリは春の風物詩ともなっています。また、その景観は、農林水産業に関連する文化的景観の重要地域の対象となっています。近年、下流域において稼働していたサケマス孵化場を停止し、ヤナを設置しなくなっからは、史跡付近でもサケの遡上と産卵が見られ



かごに入ったシロウオ

ます。上流域の津軽山地北西部に源流がある大川目沢では、良質な珪質頁岩が採取できます。これは、津軽山地北西部や平館山地に主に成層した珪質泥岩からなる小泊層が広く分布していることを反映しています。

本史跡では、これら石材が容易に入手できるため活発な石器製作を行っていたことがわかります。

③気候

青森県は、夏季が短く冬季が長い積雪寒冷地帯です。当町の位置が県北部にあることもあり、他市町村よりも比較的寒い傾向にあり、2012（平成24）年の年平均気温は9.5℃、最高気温は32.6℃、最低気温は-15.3℃です。降水量は1,345mm、平均風速は3.6m（2004（平成16）年）です（気象のデータは、青森地方気象台による観測地点「蟹田」）。特に5月から9月にかけては、冷涼な東風「ヤマセ」が吹き、低温や霧、下層雲を伴うため、晴天が少なく涼しい。「ヤマセ」は、太平洋側や下北地方の特徴ですが、外ヶ浜を含む上磯地域にも影響を及ぼし、農作物に顕著な被害が及んでいます。

④植物

津軽半島の内陸部において自然植生の現存する地域は概ね標高300mから400m以上の山地で、これはヒノキアスナロ（ヒバ）の生育限界を越えた位置に相当します。ヒノキアスナロ林は藩政時代から保護育成されてきましたが、半島北部の急峻な河谷や沢頭などでは天然のヒノキアスナロ林をみることができます。このような場所ではブナと混交することが多いようです。この上限はブナ林と接しており、オオバクロモジやオオカメノキ等の低木と混生しますが、疎な所にはチシマザサが茂っています。これは、ブナ-チシマザサ型の日本海地域の植生を示すものです。比較的高い山岳のブナ帯には部分的にダケカンバが生育します。海岸近くには、ドロイ、シバナ等で構成されます塩沼地植生、崩積土壌にはハマナス等の海浜植生、岩石地にはアサツキ、コハマギク等の海岸断崖植生がみられます（青森県立郷土館1982）。

町内を取り囲んでいる低い山地や丘陵の尾根や斜面には、ミズナラやアカマツ、クロマツなどの二次林の森林が発達しています。河岸段丘や斜面、丘陵の緩斜面には、広い範囲でスギの植林が行われています。植林された年数の違いで林の様相は異なりますが、総じて良好な美林となっています。植林されている場所は、本来ならばサワグルミやヒノキアスナロが生育するところです。そこでは、フキ、ワラビ、ウワバミソウ、ウド、タラノメ等の山菜類や、ナラタケ、ヒラタケ、



植林された山間と水田の様子（奥が陸奥湾）

シメジ、ナメコ等キノコが豊富です。

丘陵の裾や平地に接する部分には、ため池や谷地が多く存在し、ハンノキやヤチダモが生育し、休耕田や湿地にはオノエヤナギが群生しています(蟹田町1991)。

史跡周辺の景観をみると、植林されたスギ林が際立っています。

⑤動物

津軽半島には、多様な動物が生息しています。陸の大型獣では、周辺では絶滅したと言われていたツキノワグマの目撃情報が近年相次ぎ、史跡周辺でも足跡が見つかっています。また、ニホンザル、ニホンカモシカ(アオシシ)、ノウサギ、ニホンリス、ホンドタヌキ、テン、イタチ等も生息しています。史跡周辺では、アナグマ(マミ)をよく見かけます。



アナグマ(マミ)

鳥類では、ツバメ・ホトトギス、オオハクチョウ、マガン等のガン・カモ類等の季節によって見られる種類の他、留鳥のヒヨドリ、ムクドリ、セキレイ、アオサギ、キジ、トビ、ケラ等が見られます。ヤマセの際は、史跡周辺でもカモメ(ゴメ)が飛来します。

両生類・爬虫類は、カエル類やヘビ類が生息し、カナヘビ、アオダイショウ、マムシを見かけます。

昆虫類は、青森県内に2～3万種(『青森県史自然編生物』2003)が生息しているとされますが、史跡周辺で良く見かけるものでは、アキアカネ等のトンボ類(ダンプリ)、クサギカメムシ(クセンコムシやクセンコ)、キアシナガバチ、アブ、ヒグラシ、ガ・チョウ類、カメノコテントウ、コクワガタ等です。

海の大型哺乳類では、クジラやイルカが確認でき、まれにオットセイ、アザラシも確認できます。

陸奥湾の魚介類では、マダイ・アイナメ(アブラメ)・ヒラメ・クロソイ・メバル・スズキ・カレイ・マダラや回遊魚であるアジ・サバ・ブリ等、この他、トゲグリガニ・ムラサキウニ・エゾアワビ・シャコ(ガサエビ)・タコ類も生息しています。



マダイ

(2) 社会環境

史跡大平山元遺跡のある「外ヶ浜町」は、2005（平成17）年3月28日、東津軽郡の蟹田町、平舘村、三厩村の三町村の自治体が町村合併してできた町で、史跡は旧蟹田町域にあります。

①交通

蟹田地区は、青森市より北へ約27km、津軽半島東側のほぼ中央に位置し、西は北津軽郡中泊町と五所川原市に、南は蓬田村に接しています。本半島最北端となる三厩地区は、平舘地区との間に今別町を挟み、津軽海峡を隔て北海道と対峙しています。町域面積は、230.29km²（平成26年10月1日現在）の広がりをもっています。

青森市から海岸線を走る国道280号は、蟹田地区からも海岸線沿いをさらに北上し平舘地区に至り、町の境界を越え今別町へ入ります。今別町でも海岸に沿いながら西へ向かい、三厩地区増川で国道339号と合流し終点となります。国道280号は、藩政時代の松前藩が参勤交代で使った松前街道に沿った道路でもあります。国道339号は、三厩地区の海岸線を走り、龍飛では全国唯一の階段国道となっています。

蟹田地区中師で国道280号から分岐する主要地方道鰯ヶ沢蟹田線（県道12号）は、津軽半島を横断した後、南下して鰯ヶ沢町へ向かいます。主要地方道今別蟹田線（県道14号）は、史跡のある大平で県道12号と分岐し、北上し今別町で先の国道280号と合流します。



図6 津軽半島の交通網

航路は、蟹田港からむつ市脇野沢港^{わきのさわ}を結ぶフェリーが就航しています（冬季は休航）。かつては、三厩港から北海道の渡島半島の松前郡福島町福島港と結ぶフェリーも就航していましたが、現在は休業中です。

鉄道は、J R 東日本の津軽線が青森駅から蟹田駅を經由し三厩駅まで運行し、本史跡の東方500mには無人の「大平駅」があります。津軽海峡線では、常時の停車駅ではないものの、青函トンネル内にある竜飛海底駅が見学駅として観光名所になっていましたが、北海道新幹線建設に伴う工事のため、2013（平成25）年11月10日をもってその役目を終えました。その津軽海峡線は、大平駅の東方で津軽線から分岐^{なかおぐに}し、中小国駅以北はJ R 北海道の管轄となっています。2016（平成28）年3月26日には北海道新幹線が開通し、当町にも軌道が敷かれ、この開通に伴って、津軽海峡線は貨物専用となりました。



新幹線行きのバス停

町内には、循環バスが運行し、町民の重要な交通機関となっています。また、北海道新幹線「奥津軽いまべつ駅」と北津軽郡中泊町にある「津軽鉄道」の「中里駅」^{なかさと}を結ぶバス路線が、史跡のある大平にバス停を置いています。

②人口

町内の人口は、町村合併時の2005（平成17）年は8,215人、5年後の2010（平成22）年には8,000人を割り込み7,757人となりました。国立社会保障・人口問題研究所によりますと、2015（平成27）年には7,251人、その10年後の2025（平成37）年には6,190人と人口が推移すると推定しています。青森県内でも有数の過疎地であり、老年人口の割合は4割に近く、急激な高齢化が進んでいます。本史跡のある「大平集落」の人口は、1993（平成5）年は302人、約10年後の2004（平成16）年は253人、さらに約10年後の2013（平成25）年1月現在では205人と20年で約100人が減っています。2013（平成25）年1月現在の平均年齢は55.6歳です。

③産業

町の主な産業は、農業、漁業、林業です。農業経営は水稻を基幹作物とし、ソバなどの転作作物、野菜、花き、山菜等の特用林産物を組み合わせた複合経営が主体です。

漁業に関しては、3つの漁業組合があり、陸奥湾に面した蟹田地区と平舘地区はホタテ貝の養殖が盛んで、重要な産業となっています。三厩地区ではヒラメ、イカ漁やマグ

ロの一本釣りが盛んです。

町の総土地面積のうち約9割が森林面積です。その内、国有林が約9割、民有林が約1割で、林業は国有林野事業に依存している割合が高くなっています。林種は、植林されたスギを主体としています。民有林の人工林は35年生以下の若い林分が2割を占めています。

④観光

津軽半島の北端、龍飛岬は歌謡曲「津軽海峡冬景色」に歌われたこともあり、歌謡碑が建立され、有名な観光スポットとなっています。晴天時には、北海道を見渡すことができます。また、龍飛は、昭和の大公共事業であった世界最長の海底トンネルの工事拠点となり、その偉業を伝える「青函トンネル記念館」も開館しています。日本唯一の階段国道も名所となっており歩く人々が絶えません。作家太宰治は、彼の地を訪れた際「本州の袋小路」と小説『津軽』の中で述べています。その『津軽』の登場人物であるN君は、当町蟹田中師の中村貞次郎氏であり、太宰の訪れたN君の実家である旧「中貞商店」跡を経由して太宰碑のある観瀾山へ登る散策も人気です。



ホタテ



龍飛津軽海峡冬景色歌謡碑



太宰治文学碑

(3) 歴史環境

①町の歴史

町名の「外ヶ浜」というのは、平安末期から室町末期に見える地名に由来します。

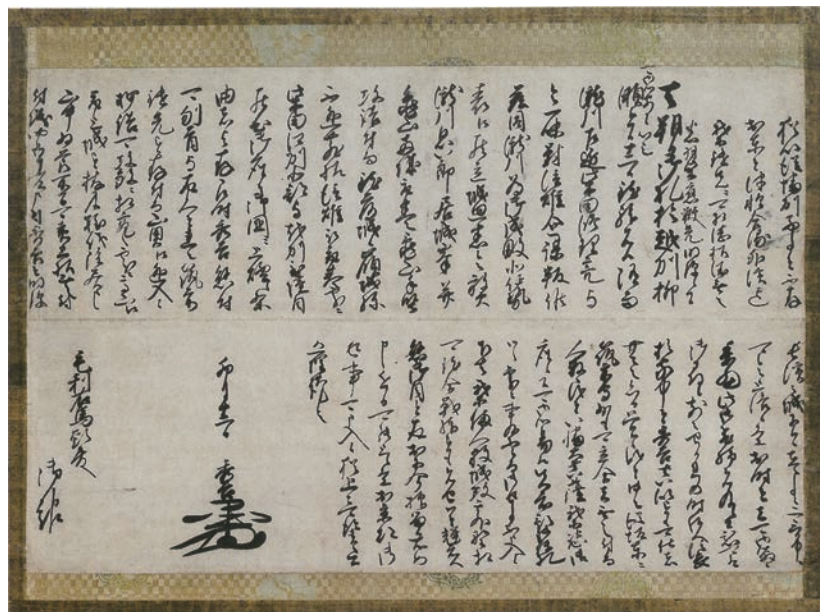
「外浜」「外ノ浜」とも記したようです。津軽の3郡（平賀・鼻和・田舎）は12世紀初頭に成立したと推定され、この3郡以外に西海岸と陸奥湾の沿岸の地域には郡が設置されず、「西浜」と「外浜」という地名で呼ばれました。「外浜」の意味については、もともと「率土之浜」であり「詩経」の「普天之下、無非王土、率土之浜、無非王臣」の句から起こったもので、王土の尽きる果てという説があります。他に京都の朝廷の「クニノウチ」の拡大運動が行き着いた限界点という説や津軽と糠部ぬかべの外なる浜の意という説等があります。西行法師（平安時代末から鎌倉時代のはじめ）の山家集（成立年不詳、1180(治承4)年頃か）

に「陸奥の奥ゆかしくぞおもほゆる壺の碑そとの浜風」と詠まれ、平安末期には歌枕の地として知られ、その後多くの歌に詠まれています。したがって、12世紀の前半には都人の間では陸奥のさらに奥に「外の浜」が存在することが知られていたようです。「曾我物語」（鎌倉末期か）には鎌倉殿の軍事・警察力の及ぶ範囲について述べら

れており、東の境界は外浜であったといえます。また、羽柴秀吉も1583（天正11）年の書状に東限を外浜とみていたととれる文言があります。天文年間（1532～1555）の『津軽郡中名字』には「東ノ卒都ノ浜」とあり、中世には日本の東の境界は、外ヶ浜となっていたことがわかります。

町名となる以前の外ヶ浜の呼称は、主に津軽半島のうち陸奥湾に面した地域を差します。また、青森市油川あたりから龍飛崎までの一帯については、上磯かみいそともいいますが、この上磯は、江戸時代前期の遺名に由来し、それは、弘前藩の代官支配地域として、組に先だって設けられた行政区域の1つ「外浜上磯遣」けんです。津軽郡田舎庄のひとつで津軽半島の東側に位置するとされています。

現在の「外ヶ浜町」は、蟹田町、平舘村、三厩村の三町村が2005（平成17）年に合併して発足しました。「外ヶ浜町」は、合併にあたり、その協議会が公募を行い決定した

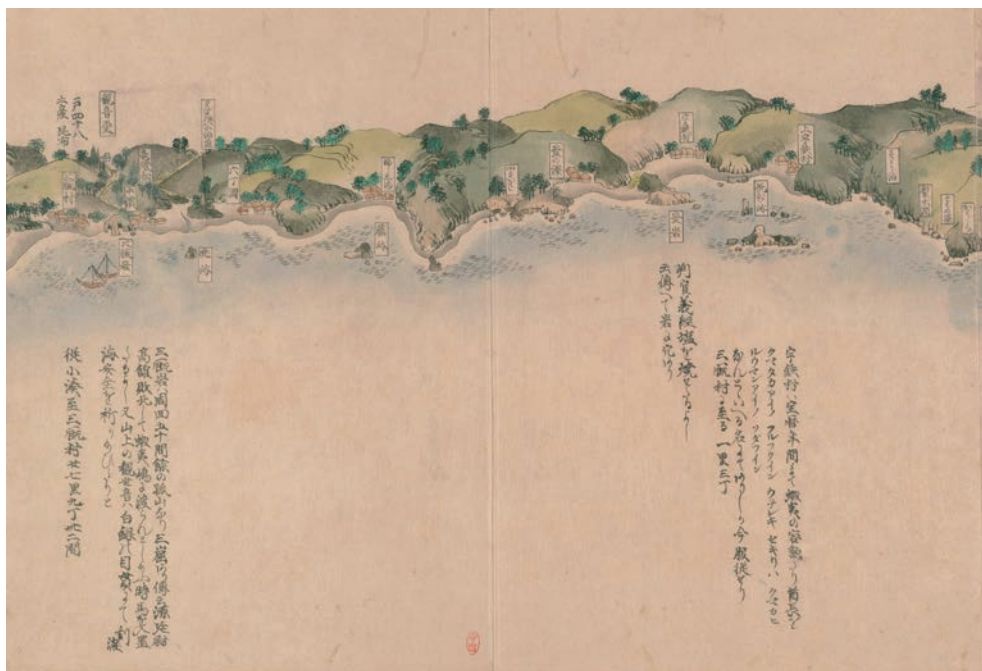


羽柴秀吉書状毛利右馬頭（輝元）宛 天正11年1583年
青森県史より転載

町名です。本史跡の所在する「蟹田」は、神似田・神田・蟹多・上田と書かれ、「かんだ」とも言ったようです。水田にカニが多く生息したことに由来する説やアイヌ語の鉄を意味する説等あるが判然としていません。藩政期には、藩の留山から切り出されたヒバなどの周辺山林の木材移出港として栄えました。弘前藩より九浦のひとつに指定され、町奉行所や沖横目、湊目付などが置かれていました。また、三厩から青森に至る、松前街道（松前道）の宿駅にあたり、水陸両方において交通の要衝として栄えました。1889（明治22）年（市制町村制の施行）にそれまでの蟹田村が、周辺の村（小国・中師・山本・南沢・大平・石浜の一部）を合併し旧村名を引き継ぎ、1941（昭和16）年に蟹田町となりました。

「平館」は、鎌倉幕府の命により当地に赴いた源氏の一族「平館貞宗」の姓に由来するようです。貞宗はその後城を築き付近を開拓し、集落を形成したといえます。室町期には、「高坂弾正」が平館の陣屋に配属され、一帯を支配したと伝わっています。1889（明治22）年にそれまで平館村が、周辺の村（今津・野田・石浜の一部）を合併し旧村名を引き継ぎました。

「三厩」は、古くは三馬屋とも書き、その由来は義経北行の伝説やアイヌ語説、水駅による説などがあります。1645（正保2）年の「津軽郡之絵図」に村名は見えませんが航路が記され、湊として機能していたことがわかります。松前藩主の参勤交代や幕府巡検の蝦夷地渡海の際の重要な地点で、木材や蝦夷地の海産物の中継地として栄えました。また、津軽海峡に面した地域には、「狄村」と記されたアイヌの人々と考えられる村があって、和人と隣り合って生活していたことが、検地台帳や藩の日記に表されています。1889（明治22）年にそれまでの三厩村が周辺の村（増川・宇鉄）を合併し旧村名を引き継ぎました。



大日本國東山道陸奥州驛路圖5巻より
（国立国会図書館デジタルコレクションより転載）

史跡のある蟹田地区の「大平^{おおだい}」という地名の由来は、当地が山間部から急に開け、広大な平坦地となっているためといわれています。江戸時代後期の国学者菅江真澄は、1798（寛政10）年に弘前から中泊町の今泉を経て蟹田へ至る途中、大平地区を「いとひろう大平という村にわけいでて」と「にしきのはま」で表現しています。江戸時代にはひとつの村を形成していなかったようで、東側にある「山本集落」の前身「山本村」の一部とみられています。周辺が山に囲まれるためか古くから、良質なヒバ材が産出することで知られていたようで、『弘前藩庁日記（弘前城中の記録）』によると、1722（享保7）年の伊勢神宮の式年遷宮に際し、御献木の村割り当てをうけたことがわかります。



大平八幡宮（宵宮）

林産の面では、村の扱いにされているものの、「旧高旧領」によると、石高は無高とあり、そのためか1869（明治2）年の諸組村寄帳には大平の村名はありません。史跡内にある「八幡宮」は、貞享検地（1687年）に、「八幡社二十四歩」とあり、その頃には鎮座していたことがわかります。

1877（明治10）年頃の『陸奥国津軽郡村誌』になると、大平の村名が記されており、戸数14、人口120（男68女52）、税地は田19町4反余、畑9町8反余、宅地2町7反余、まぐさ場33町余、萱野8町4反余とあります。1989（明治22）年の合併により、それまでの大平村から蟹田村の大字になりました。2014（平成26）年現在の大平集落の人口は、201（男94女107）名、81世帯が生活しています。

②町内の遺跡

発掘調査された遺跡から歴史を辿ると、本史跡が最も古く、その後縄文時代前期や中期の遺跡や後期の遺跡へと続きます。学史的にも著名な遺跡もあって、代表的な遺跡を以下に記します。

縄文時代前期等の中ノ平遺跡^{なかのたいら}（三厩地区）は、1972・73（昭和47・48）年青森県教育委員会によって発掘調査が実施されました。土器廃棄場では、縄文時代前期末から中期、後期前葉まで層位的に発掘され、型式編年を体系づけたことで知られています（青森県

教育委員会1975)。

縄文時代晩期の今津(1)遺跡(平館地区)は、平館村史編纂に関連して、1972(昭和47)年に村教育委員会によって発掘調査が実施されました。縄文時代晩期の粗製土器が多く、製塩土器も出土しています(平館村1974)。1984(昭和59)年には、道路改良に伴い県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施し



象嵌土製品(宇鉄遺跡)

ました。縄文時代晩期の遺構は、屋外炉のみでしたが、土器や石器、土偶等を含む多量の遺物が密集して出土しました。鼎状の三足土器の出土が特筆されます(青森県教育委員会1986)。2002(平成14)年には、弘前大学人文学部が、亀ヶ岡文化研究を目的とし学術調査を実施しています(弘前大学人文学部考古学研究室2005)。

縄文時代晩期から弥生時代の宇鉄遺跡(三厩地区)は、1923(大正12)年頃に宇鉄小学校改築工事に伴って出土した土器類により広く知れ渡りました。その後、1955(昭和30)年に、慶応義塾大学により発掘調査が実施され、縄文時代晩期の土器類が出土し、その概要は『三厩村誌』に記されています。1975～77(昭和50～52)年の3ヵ年、1987(昭和62)年には、計4次にわたって青森県立郷土館が発掘調査を実施したところ、弥生時代の土壇墓や甕棺、多量の管玉、土器類が多数出土し、その一部は国の重要文化財に指定されています(青森県立郷土館1979)。1982(昭和57)年には道路の改良に伴い、1993・94(平成5・6)年には学校建設等に伴い、村教育委員会が発掘調査を実施し、縄文時代の晩期を主とする竪穴住居跡や土坑墓、祭祀遺構等の数多くの遺構が検出され、土器類や玉、象嵌された土製品等多様な遺物も出土しています(三厩村1994・95・96)。



土壘と壕(山本遺跡)

平安時代の遺跡としては、本史跡のある大平集落の隣り、山本集落に山本遺跡があります。

山本遺跡は蟹田川に沿った中位段丘上に位置し、河川との比高差は約30m、いわゆる環壕集落や防御性集落、区画集落と呼ばれる遺跡です。平坦面に住居、周辺に壕をめぐらすが、東西南北で条数が異なり、北は蟹田川に面しては1条、西は3条、南は4条、東は2条である。降下火山灰の分析や出土した遺物から、10世紀後半の遺跡と考えられます（町教委2012）。

近世の遺構としては、平館地区に西洋風の平地式台場の「平館台場跡」が良好な状態で遺存し、県史跡に指定されています。その付近には、台場に勤番した藩士たちの陣屋跡（町指定検討中）が残されており、堀跡などが見ることができ、緑地化されています。

③文化財

国指定の文化財としては、先に述べた宇鉄遺跡出土品があります。368点の玉類をはじめ土器・石器等559点が1991（平成3）年に国の重要文化財に指定されています。

県指定の文化財としては、三厩地区中浜の義経寺所蔵の観世音菩薩像があります。円空作のもので1963（昭和38）年に県重宝に指定され、1667（寛文7）年の銘があります。

彫刻では他に、平館地区平館福昌寺に、1666（寛文6）年円空作の観音菩薩坐像が、蟹田地区上町の1855（安政2）年に建てられた専念寺の山門1階には、仁王像（明治期）があります（ともに町指定文化財）。考古資料や彫刻以外では、懸額や絵馬があります。未指定のものも含め、主なものとしては以下のものがあげられます。

史跡のある大平八幡宮には、武者絵を描いた懸額が奉納されています。極彩色の大型



専念寺山門の仁王尊像

のものが多く、1854～63年の安政から文久年間の年号が見られます。北陸地方の日本海側で流通した額を購入したものでしょう。蟹田地区^{しもまち}下町の蟹田八幡宮には、付け合い句という懸額があつて、1852（嘉永5）年、1861（文久元）年の年号があります。また、津軽神楽の形態を伝える伝承の神楽のひとつ獅子舞がありました。

幕末には、異国船の来航騒ぎが起こり、1847（弘化4）年平舘地区平舘、同野田、1848（嘉永元）年三厩地区宇鉄に上陸しています。その時の様子を描いた絵馬が三厩地区^{かまのさわ}釜野澤にある神社に奉納されています（町指定文化財指定を検討中）。藩士たちが、勤番の無事を願い、願掛けをした絵馬が平舘神社に残されています（町指定検討中）。懸額の新しいものとしては、蟹田地区^{しおこし ふかどまり}塩越の深泊稻荷神社に明治期の漁撈懸額があります。大漁への感謝とより一層の豊漁、安全を願ったものです。平舘台場の周辺には、松前藩が参勤交代に用いた街道に立派な松が並び、海岸に映えた美しい景観です。その中に樹齢600年を超える「長寿の松」や2本並ぶ古木「夫婦松」もあります。樹木では、樹齢200年のサイカチの木が蟹田地区^{しも おぐに}下小国の住吉神社のご神木として青々と葉を繁らせています。

また、蟹田地区^{わに が ぶち}鰐ヶ淵の一本松（鍛冶屋の一本松）は、樹齢500年を超える松の大木で、江戸時代は北前船を大縄で繋いでいたともいわれています。

三厩地区^{ふじしま}藤嶋にも、樹齢250年ほどの藤の木があり、その季節にはきれいな花を咲かせています。

日本海側との交流を示すものとしては、石浜の北側の集落、蟹田地区塩越の墓地にある石塔があげられます。これは、地元廻船業者の墓と言われ、上方の石材を用いて建碑したものです。^{ますかわ}増川の荒馬と^{ろくじょうま}六條間の太刀振は、古い農耕の祭りを物語るものとして、町の無形民俗文化財に指定されています。



三厩藤嶋の藤の花

4. 整備の目的と基本方針

(1) 目的

史跡大平山元遺跡の本質的な価値は以下の三点にまとめることができます。

整備及び公開・活用は、それらを損なうことなく、わかりやすく後世へ伝えることを目的とします。

- ・ 後期旧石器時代後半期から縄文時代草創期への移行の様相を知ることができること。
- ・ 後期旧石器時代後半期における日本列島各地との関係を示す石器が多数出土すること。
- ・ それら遺物群がそれぞれまとまって分布し、生活と石器製作の場が特定できること。

(2) 基本方針

整備及び公開・活用の基本方針として次の5つの項目を定めます。

①史跡の適切な保護

史跡の本質的な価値を構成する諸要素については、厳格な保護を図ります。

②次世代へ継承

史跡の本質的な価値や内容の次世代への継承を確実に図ります。

③追加指定

史跡周辺の状況を把握し条件が整い次第、追加指定を行います。

④公有地化

史跡を適切に保存・活用するため整備ゾーンの公有地化を進めます。

⑤整備の方向性

地域住民の憩いの中心地としながら、町の社会教育・観光・防災の拠点とし環境を整備します。

5. 基本構想

(1) テーマ

- ・縄文土器の始まりを示す遺跡
- ・氷期からのくらしの変化を探る

(2) 指定地内のゾーニング

保存管理計画で示された地区区分毎の方針を定めます。

第1種地区

土器使用の始まりを理解するゾーン

- ・ここが最古段階の土器が出土した場所であることを理解し、その立地や背景を考えることができる場所とします。
- ・既存建物等があることから、最優先で公有地化を図り、史跡の本質的価値を構成する諸要素以外の要素の撤去を進めたのち整備を行います。

第2種地区

土器使用に至るまでの歴史を理解するゾーン

- ・ここが複数の石器文化が重なっている場所であることを理解し、土器使用に至るまでの石器文化の流れを考えることができる場所とします。
- ・神社境内地ですので、当面は現状のままとしますが、整備の際には借地等を考慮します。

第3種地区

遺跡が形成された地形や周辺環境を理解するゾーン

- ・遺跡の立地をわかりやすく示すとともに、植栽をし、当時の環境を考えることができる場所とします。
- ・既存建物や畑地等があり、現在は住民が生活していますので、当面は現状のままとしますが、条件が整い次第公有地化を図り、整備を行います。

第4種地区

追加指定を検討し、指定後は、第3種と同様に条件が整い次第公有地化を図り、整備を行います。

凡 例

— 史跡指定の範囲

第1種地区

第2種地区

第3種地区

第4種地区

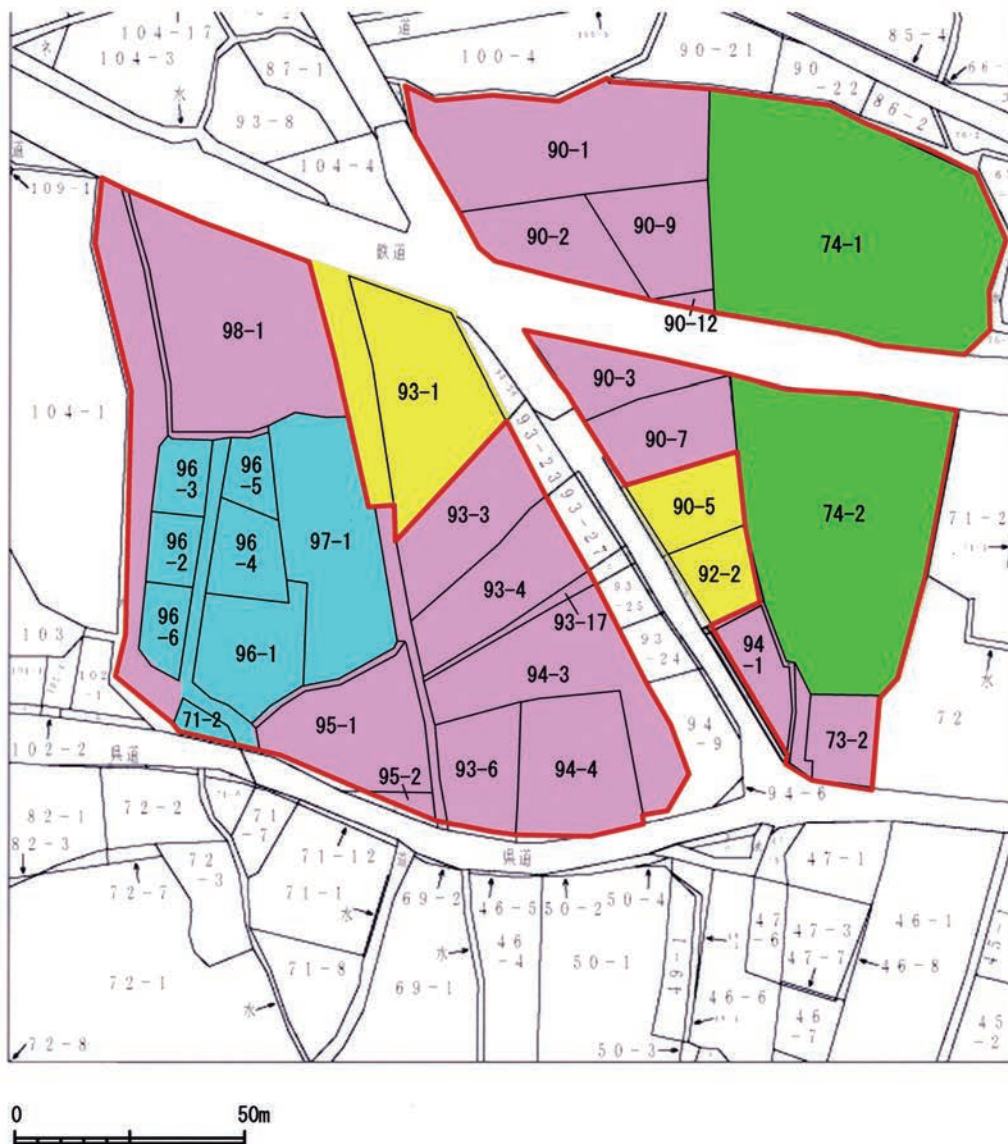


図7 保存管理計画書における地区区分（平成28年3月31日現在）

（３）指定地周辺のゾーニング

史跡指定地隣接地

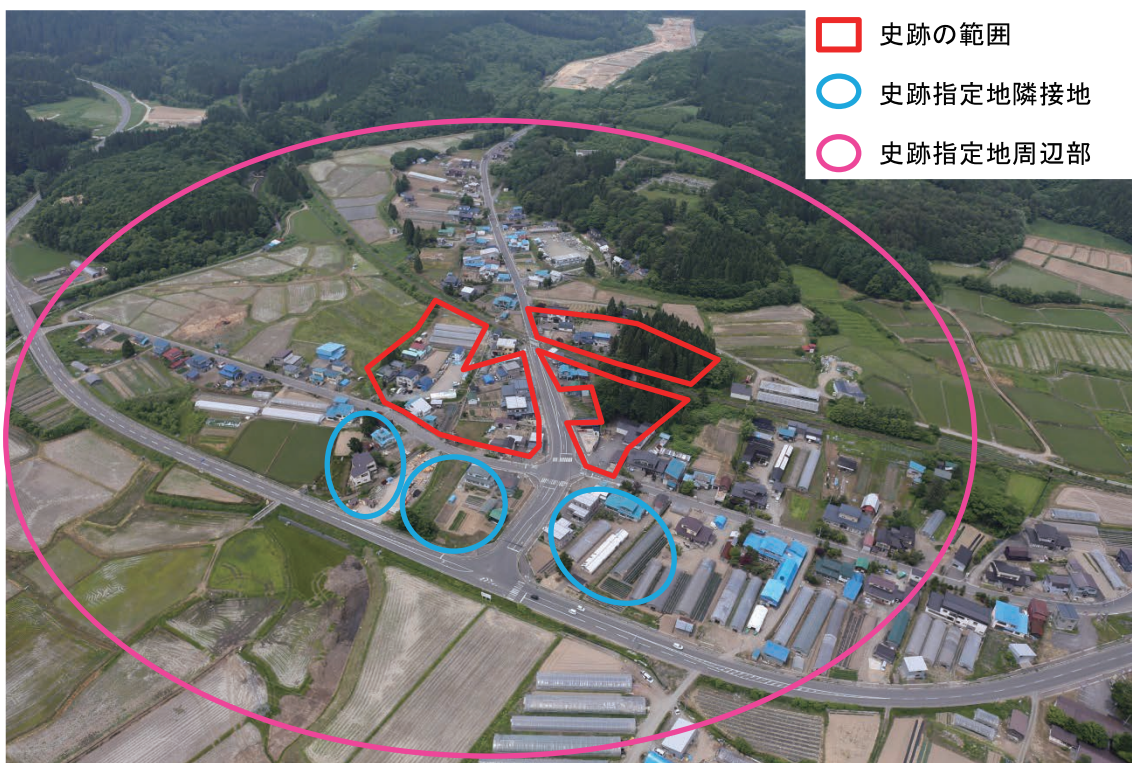
住民と見学者の便益のためのゾーン

- ・住民が憩い、誇りを感じることができる史跡とするとともに、多くの人が史跡の見学や活用がしやすくなるよう環境整備を行う場所とします。
- ・適切な場所を確保し、ガイダンスゾーン、駐車ゾーンとしての整備を行います。

史跡指定地周辺部

史跡をとりまく環境を理解するためのゾーン

- ・住民生活の場を基本としつつも、史跡の理解に繋がるルート設定を行う場とします。
- ・蟹田川との関係を理解するためのモデルルートを示します。
- ・指定地と関係の深い遺跡へのルートを示します。



史跡上空より（上が北方向）2014（平成26）年撮影

緩衝地帯（バッファゾーン）

景観に配慮するゾーン

- ・積極的な整備は行いませんが、景観への配慮を求めます。

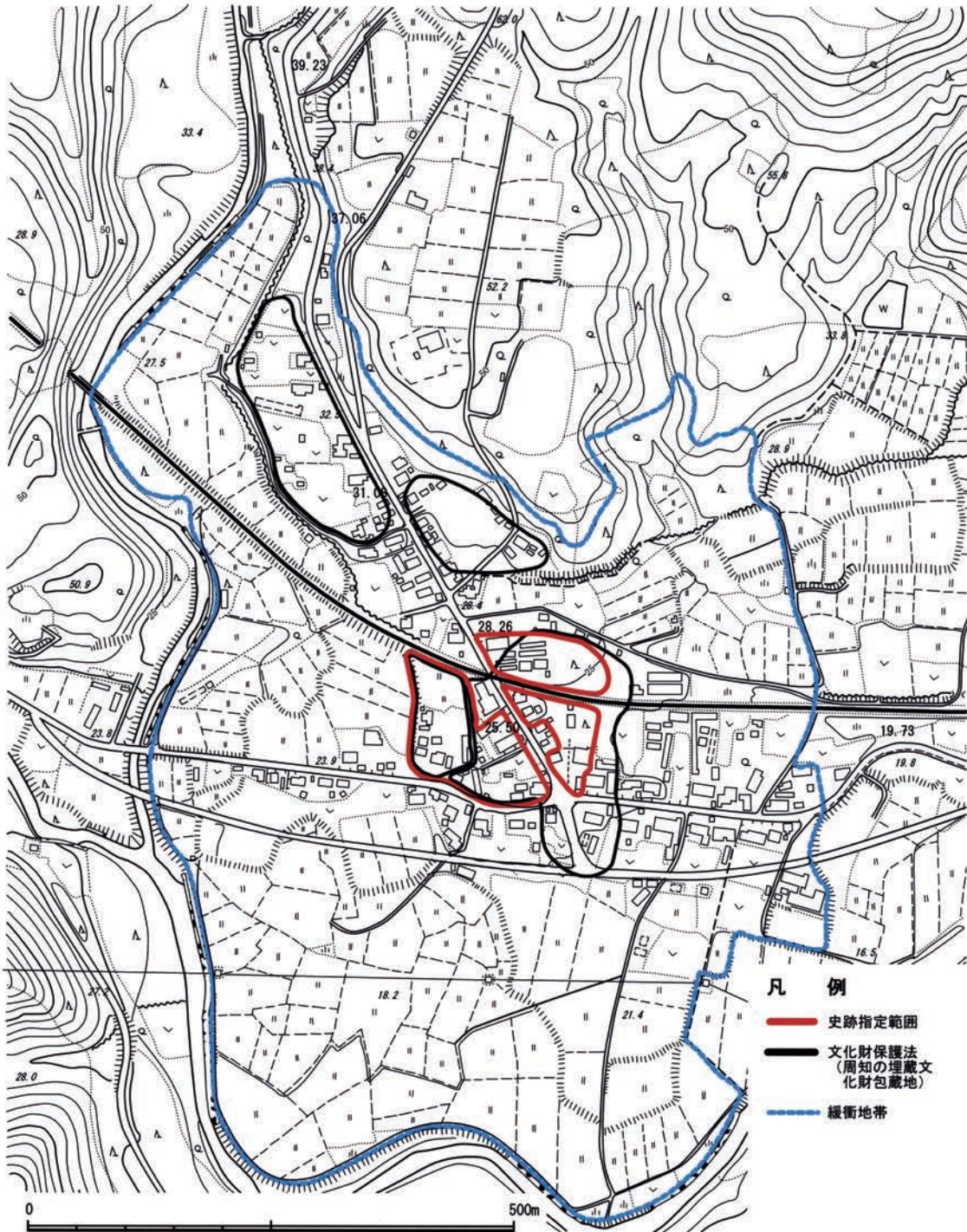


図8 周辺環境図（平成28年3月31日現在）

6. 保存のための整備の方針

(1) 保存のための整備の方針

史跡を適切に保存するため、整備を行います。

①史跡であることを示します

- ・文化財保護法第115条第1項及び「史跡名勝天然記念物標識等設置基準規則」に基づき、標識、説明板を設置します。

②指定範囲を明確にします

- ・文化財保護法第115条第1項及び「史跡名勝天然記念物標識等設置基準規則」に基づき、境界標を設置します。

③史跡の本質的価値を構成する諸要素に影響が及ばないよう配慮します

- ・必要に応じて遺物等を保護する盛土層を設けます。
- ・標識、説明板等の設置は保護盛土層内に留めます。

④史跡内に毀損等が生じた場合は原状復旧を行います

- ・原状復旧は、毀損以前の状態に復旧することを原則とします。
- ・復旧の際に必要な場合は、発掘調査を行います。

7. 公開・活用のための整備の方針

(1) 公開・活用のための方針

- ①史跡を柵で囲まず、常時公開します。
- ②学校教育・社会教育等の場としての活用を図ります。
- ③町民の文化的活動及び憩いの場としての活用を図ります。
- ④地域の象徴、文化的観光の資源としての活用を図ります。

(2) 史跡内の施設整備の方針

- ①案内表示、解説表示を行います
 - ・材質や規模、構造は景観を損なわないように配慮します。
 - ・数は必要最小限に留めます。
 - ・設置は保護盛土層内に留めます。
- ②遺物の出土状況の表現の方針
 - ・平面表示や立体表示の他、映像表現等も考慮します。
- ③植生等当時の環境を表現します
 - ・花粉等のデータに基づいて行います。
- ④必要に応じて史跡内の発掘調査を行います
 - ・史跡の内容を確認する必要がある場合
 - ・整備・活用や保存のために必要がある場合など

（３）ガイダンス施設の方針

住居跡等の遺構をもたない史跡の性格や、積雪地帯という地域性から、史跡を理解してもらうためにはガイダンス施設が重要な役割を持つことになります。

また、老朽化した大山ふるさと資料館、指定地内からの移転を迫られる集会所の機能、交通の要衝としての役割も考慮する必要があります。

①史跡のガイダンス

- ・住民や見学者が史跡を総合的に理解できるよう、実物資料や、パネル等の展示を行います。
- ・世界史の中及び日本史の中における史跡の位置づけを示すとともに町の歴史も理解できる展示を行います。
- ・史跡の本質的価値の理解を促すため、史跡からの出土品だけではなく、町内の他の遺跡の資料や民俗資料等も活用した展示を行います。
- ・史跡見学者のビジターセンターとしての便益も供します。

②その他の機能

- ・町内の文化財の適切な保存と活用ができるよう、資料を収蔵します。
- ・「津軽半島のへソ」として、周遊可能な遺跡や施設の紹介に努めます。
- ・付近を通るあらゆる人が気軽に立ち寄ることができる施設とします。
- ・地域住民が気軽に集まり、交流できる施設とします。
- ・学校との連携や体験学習、環境学習、社会教育の拠点となる施設とします。
- ・防災機能を持った施設とします。
- ・物販等の利用ができる施設とします。

8. 管理・運営の方針

(1) 管理・運営の方針

①町と住民との関わり

- ・町と住民が協力し、史跡の適切な管理に努めます。

②町と各種団体との関わり

- ・活用主体としての団体やサポーターの組織化をめざします。

9. 事業に向けた課題の整理

(1) 課題と今後の展望

①史跡大平山元遺跡整備基本構想に基づき、整備基本計画を策定

- ・整備基本計画の中で、経費を含めた年次計画や事業の推進体制を示します。
- ・平成28年度中に検討に着手し、平成29年度に策定します。

②整備基本計画に基づく設計と整備事業の推進

- ・平成30年度に『基本設計』を行います。
- ・基本計画、基本設計に基づいて実施設計を行い、整備を進めます。

③公有地化の推進

- ・地域住民と話し合いを進めながら、平成30年度には、第1種地区の公有地化率8割を目指します。
- ・第3種地区の公有地化を推進します。
- ・境界杭の設置を進めます。
- ・ガイダンス施設予定地の公有地化を進めます。

引用・参考文献

- | | | |
|-------------------|---------|---|
| 青森県 | 1998年 | 『青森県の地質』 青森県 |
| 青森県 | 2001年 | 『青森県史 自然編 地学』 青森県 |
| 青森県 | 2003年 | 『青森県史 自然編 生物』 青森県 |
| 青森県 | 2016年 | 『青森県史 資料編 中世4』 青森県 |
| 青森県教育委員会 | 1975年 | 『中の平遺跡発掘調査報告書』 青森県教育委員会 |
| 青森県教育委員会 | 1985年 | 『尻高(2)・(3)・(4)遺跡』 青森県教育委員会 |
| 青森県教育委員会 | 1986年 | 『今津遺跡・間沢遺跡』 青森県教育委員会 |
| 青森県教育委員会編 | 1998年 | 『青森県遺跡地図』 青森県教育委員会 |
| 青森県地学教育研究会編 | 2003年 | 『青森の自然をたずねて』 築地書館 |
| 青森県立郷土館 | 1979年 | 『宇鉄Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 青森県立郷土館 |
| 青森県立郷土館 | 1979年 | 『大平山元Ⅰ遺跡』 青森県立郷土館 |
| 青森県立郷土館 | 1980年 | 『大平山元Ⅱ遺跡』 青森県立郷土館 |
| 青森県立郷土館 | 1981年 | 『大平山元Ⅲ遺跡』 青森県立郷土館 |
| 青森県立郷土館 | 1982年 | 「地質」『津軽半島の自然』 青森県立郷土館 |
| 青森県立郷土館 | 1989年 | 『三厩村宇鉄遺跡発掘調査報告書(Ⅱ)―弥生甕棺墓の第4次調査』
青森県立郷土館 |
| おいらせ町 | 2010年 | 『史跡阿光坊古墳群整備基本構想・基本計画策定報告書』
おいらせ町 |
| 大平山元Ⅰ遺跡発掘調査団 | 1999年 | 『大平山元Ⅰ遺跡の考古学調査』 大平山元Ⅰ遺跡発掘調査団 |
| 角川書店 | 1985年 | 『角川地名大辞典2 青森県』 角川書店 |
| 蟹田町 | 1991年 | 『蟹田町史』 蟹田町 |
| 蟹田町 | 1999年 | 「風しるべ蟹田町」蟹田町勢要覧 蟹田町 |
| 蟹田町教育委員会 | 1992年 | 『大平山元Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 蟹田町教育委員会 |
| 蟹田町教育委員会 | 2004年 | 『大平山元Ⅱ遺跡―主要地方道鯨ヶ沢蟹田線道路改良工事に伴う発掘調査報告書Ⅰ』 蟹田町教育委員会 |
| 蟹田町教育委員会 | 2005年 a | 『大平山元Ⅰ遺跡―2004年発掘調査Ⅰ』 蟹田町教育委員会 |
| 蟹田町教育委員会 | 2005年 b | 『大平山元Ⅱ遺跡―主要地方道鯨ヶ沢蟹田線道路改良工事に伴う発掘調査報告書ⅡⅠ』 蟹田町教育委員会 |
| 外ヶ浜町教育委員会 | 2006年 | 『大平山元Ⅰ遺跡―2000～2004年発掘調査Ⅰ』 外ヶ浜町教育委員会 |
| 外ヶ浜町教育委員会 | 2007年 | 『大平山元Ⅱ遺跡―主要地方道鯨ヶ沢蟹田線道路改良工事に伴う発掘調査報告書ⅢⅠ』 外ヶ浜町教育委員会 |
| 外ヶ浜町教育委員会 | 2009年 | 『大平山元遺跡―2006～2008年発掘調査Ⅰ』 外ヶ浜町教育委員会 |
| 外ヶ浜町教育委員会 | 2011年 | 『大平山元 旧石器時代から縄文時代への移行を考える遺跡群』
外ヶ浜町教育委員会 |
| 外ヶ浜町教育委員会 | 2012年 | 『山本遺跡』 外ヶ浜町教育委員会 |
| 外ヶ浜町 外ヶ浜町教育委員会 | 2016年 | 『史跡大平山元遺跡保存管理計画書』 外ヶ浜町
外ヶ浜町教育委員会 |
| 第一法規 | 2013年 | 『月刊文化財2月号593号』 第一法規 |
| 南部町 南部町教育委員会 | 2014年 | 『史跡聖寿寺館跡整備基本計画書』 南部町 南部町教育委員会 |
| 平舘村 | 1974年 | 『平舘村史』 平舘村 |
| 弘前大学人文学部日本考古学研究室編 | 2005年 | 『青森県東津軽郡平舘村今津遺跡発掘調査報告書』
弘前大学人文学部日本考古学研究室 |

文化庁文化財部記念物課監修	2005年	『史跡等整備のてびき』 同成社
平凡社	1982年	「青森県の地名」『日本歴史地名大系第2巻』 平凡社
保育社編	1986年	『日本の古代遺跡 青森』 保育社
三厩村	1962年	『三厩村史』 三厩村
三厩村教育委員会	1983年	『宇鉄Ⅲ遺跡発掘調査報告書』 三厩村教育委員会
三厩村教育委員会	1994年	『宇鉄遺跡発掘調査報告書』 三厩村教育委員会
三厩村教育委員会	1995年	『宇鉄遺跡発掘調査報告書』 三厩村教育委員会
三厩村教育委員会	1996年	『宇鉄遺跡発掘調査報告書』 三厩村教育委員会

おおだいやまもと
史跡大平山元遺跡整備基本構想

青森県東津軽郡外ヶ浜町
外ヶ浜町教育委員会
2017（平成29）年3月31日

〒030-1393
青森県東津軽郡外ヶ浜町字蟹田高鍋屋44-2
Tel：0174（31）1233 Fax：0174（31）1234
